三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2008,　第28号，77－82頁

メタ認知能力を育てるメディア・リテラシー教育

伊藤　幸洋*・佐藤　年明**

小学校5学年では、社会科や国語科で「ニュース番組作り」に関する単元がある。これらの学習と関連づけて、教科横断的な総合的な学習として、情報リテラシー（情報を読み書きする力）を子どもたちにつけたいと考えた。そこで、「身近にある笹尾中央公園を周りの人により知ってもらう」「情報リテラシーの力をつける」ことをねらいに、総合的な学習の時間の単元「笹尾中央公園を宣伝しよう」に取り組んだ。伝え手と受け手の認識が一致するかの振り返りを繰り返していくことは、メタ認知能力獲得の基礎となると考える。

今回の実践では、ゲストとのやり取りやニュース作り・単元全体で相当な時間数を必要とした。総合的な学習の時間は、時間が掛かる活動領域だが、練り上げの過程が必要で、そこに値打ちがあると考える。

キーワード：「メディア・リテラシー」「メタ認知」「ニュース」「コミュニケーション」「練り上げ」

1　はじめに ―「笹尾中央公園」と5学年メディア単元

親しい友達とは多くの時間を過ごすが、学級の場になると自分の思いを伝えようとしない子どもたち。学習に対して主体的に何かをしたいという思いをなかなか表現しない子どもたち。挙手したり発言したりする子・発言に対して反応したり付け足したり質問したりする子が、ほとんどいなかった。40人単学級の中に埋もれている様子だった。

学年当初の子どもたちの姿に対して、自分たちが調べたことを表現する手段や、人とのつながりを深めていくコミュニケーションの力を育てたいと考えていた。これは、学習に対する関心・意欲が、それまでの学年であまり積み重ねられてこなかったと感じたためである。学習集団の関わりの中で、子どもたちの関心・意欲を持てる土台作りから始めることが求められていると判断した。

笹尾中央公園は、子どもたちの遊び場になっていたり、これまでの学年での授業で活動したりと、様々な活動をしている身近な場所である。子どもたちが自然や人と関わることができる場、子どもたちの身近にあり、いつでも気軽に安心して立ち寄れる場、地域の方の願いや思いが込められている場であり、価値の高い地域教材であると考えた。

5学年には、社会科「わたしたちのくらしを支える情報」（大阪書籍）、国語科「ニュース番組作りの現場から」（光村図書）という教科書教材がある。これらの学習と関連づけて、教科横断的な総合的な学習を進めていくことにした。

＊員弁郡東員町立笹尾東小学校
＊＊三重大学教育学部学校教育講座

2　メタ認知の機会としてのメディア・リテラシー

今の社会には、様々なメディアがあり、情報があふれている。「メディア」とは、「媒体。手段。特に、マス・コミュニケーションの媒体。」[1] のことである。以前はテレビやラジオ、新聞だけだったが、最近は、インターネットや携帯電話も盛んに使われるようになり、子ども自身もこういったメディアを使うことが増えてきた。

子どもたちの生活の中にもメディアは深く入り込んでいて、「ゲーム脳」やメディアとの付き合い方について懸念されている。最近では、インターネットや携帯電話の利用の仕方にまつわるトラブルについての問題も提起されている。

(1) それぞれのメディアが持つ特色を知る

「メディア・リテラシー」とは、「情報が流通する媒体（メディア）を使いこなす能力。メディアの特性や利用方法を理解し、適切な手段で自分の考えを他者に伝達し、あるいは、メディアを流れる情報を取捨選択して活用する能力のこと。」[2] とされている。

我々はともすれば受身的にメディアと関わり、知らず知らずのうちにメディアの影響を大きく受けている。情報の送り手には伝えたい意図がある。情報の受け手がそれを無批判に受容するだけだと、悪影響を受ける危険がある。どのようにメディアと付き合えばいいのかを考えるために、視聴者が番組を批判的に見たり、情報を能動的に発信したりする活動が必要である。

自分たちのメディアとの関わりを振り返ることで、それぞれのメディアの特色に気づくことができると考える。

また、自分たちで番組を作ることでメディアの送り手を経験し、メディアを利用する時に活かすことができる。

(2) メディアを活用して地域のよさを共有する

社会では様々な出来事が起こっているが、すべてを番組で取り上げることはできない。メディアは伝達する情報を取捨選択している。

「メディアは、世界で起こっているさまざまな出来事のなかで、何がもっとも重要で何がそれほど重要でないかということや、重要性の順位を日々決定し、その解釈にもとづいて構成する『現実』を、私たちに提示している」[3] ことに気づく必要がある。

「メディアリテラシーとは、（中略）メディアが誰によってどのように作られたか、どんな技術と知恵でできあがっているかということをよく知り、吟味しながら選ぶこと、また自分たちでも作ったり、表現したりできるようになるための素養や能力を育む営みです。さらに、メディアが情報をただ伝えるための道具ではなく、その人らしさや地域のよさを共有するための道具であることなど、メディアをめぐる文化についても意識できるようになることも視野に入っています。」（下線は引用者）[4]

どの情報を選択し、どのように情報を発信するか、情報リテラシー（情報を読み書きする力）を子どもたちにつけていく必要があると考える。

しかも、地域教材について調べ、地域のメディアに出演している人から学ぶことで、これまでのメディアとは違った見方を知り、情報の選択・事実を伝えることの大切さに気づき、主体的に身近に学ぶことができる。

(3) メタ認知能力を育てる

情報を相手に伝えるには、自分の認識自体を客観的に認識対象とすることができる「メタ認知」能力が必要である。

相手に伝える内容だけではなくて自分があることを相手に伝えているということ自体を意識し、事実を正確に伝えているか、この伝え方で伝え手である自分と受け手である相手の認識を一致させることができるかを振り返る。この振り返りを繰り返し行なう過程で、メタ認知能力が高度化していく。

教科の授業では、教える内容・時間に制約があるので、子どもが伝える活動を反復して行なえる条件が整いにくい。総合的な学習の時間でメディア・リテラシーというテーマを設定すると、比較的ゆったりした時間配分の中で伝える技術を身に付けていく活動（カリキュラム）を編成できる。活動の中で教師は子どものメタ認知が育ったかどうかを確かめることができる。

主体的に情報を発信するためには、自分たちに「ぜひとも伝えたい！」と願うものがあるかどうかが問われる。他者との会話を通して問題解決し、学習の振り返りを行なっていく。他者とのやりとりによって、自分の考えが伝わったかどうか気づいていく。その過程で「自分はこのように考え、このように伝えていた」ということ自体を意識するようになる。このようなメタ認知を繰り返し行える環境を作っていくことで、自己認識、他者認識も深まっていく。

3　単元の指導計画（全 92 時間）

情報の発信する側になり、相手にわかりやすく伝える手段を考えることを年間テーマに設定し、笹尾中央公園を宣伝する活動を組んだ。

1 学期　指導計画（全 29 時間）

第一次　「笹尾中央公園」を調べる課題作り　6 時間

笹尾中央公園に出掛け、五感を働かせて感じたこと・発見したこと・知りたいことを見つけ、これから調べていく課題を持たせた。

○　春の笹尾中央公園に行き、番号作文を書く④
○　ポストイットで課題作りをする　②

第二次　4 つのリサーチ活動　12 時間

笹尾中央公園という題材に対して、実際のゴミ拾い活動・自然観察・町役場への質問・当時のことを知る方にお話を伺う、という活動を行なった。

○　企画書作り・打ち合わせ　④
○　ゴミ 0 作戦　（笹尾中央公園）　③
○　植物リサーチ部隊　（笹尾中央公園）
○　池・公園についての疑問解決（町土木課）②
○　桜にまつわる話聞き取り（岡本勇さん）　③

第三次　授業参観で「紙芝居セッション」を　11 時間

1 学期は「ポスターセッション」を通して事実を見つめる視点を持たせた。笹尾中央公園について家の人に情報を発信する活動をした。

○　ストーリー作り　②
○　下書き・清書　⑤
○　リハーサル・本番　③
○　振り返り（作文・ポートフォリオ）　①

2・3 学期　指導計画（全 63 時間）

下記の時数以外に、国語「ニュース番組作りの現場から」に⑨時間、社会「くらしを支える情報」に③時間。

第一次　「メディア」とは　3 時間

自分たちのメディアとの関わりについて考えながら、ニュース番組の構造を読み取った。そして、発表会までのプロジェクトチームを作り、班活動を取り入れた。

○　自分たちのメディアとの関わり調査　②
○　一分間のニュース番組分析　①

第二次　「週刊笹尾中央公園トピックス」を作ろう　33 時間

ゲストティーチャーと何回も関わる場を持ちながら、デジタルカメラやビデオなどのメディア機器を使い、自分たちでニュース番組を作った。

○　とういんプラムチャンネルの見学　③

○ 企画会議（何を伝えたいか） ③
○ 取材（撮影・インタビュー・質問・アンケート調査・ゴミ拾い）とまとめ ⑦
○ 原稿作成（小寺さん講座・班別） ⑧
○ 編集（読み方講座・原稿手直し） ③
○ 再取材・資料作り・リハーサル ⑤
○ ニュースの完成と振り返り ④

第三次 「年刊子どもニュース～メディア・リテラシー」を作ろう 27時間

2学期に行なったメディア・リテラシーの学習を生かしながら、笹っ子発表会で「笹尾中央公園」について知られていないことを全校・家の方・地域に伝えた。

○ NHK津放送局見学
○ 舞台での発表に向けた台本作り ⑤
○ 舞台練習と本番 ⑯
○ 振り返り（作文・ポートフォリオ） ⑥

4 本実践におけるメタ認知能力の獲得の手段

「2 メタ認知の機会としてのメディア・リテラシー」で述べたことが達成できるよう、単元指導計画を作成した。メディア・リテラシーを通してメタ認知能力を獲得させるために、授業者が4つの課題を立て、獲得の場を作る際に必要な事項を考えた。

(1) メディアに対する意識をつかむ～課題への関心

子どもたちが「笹尾中央公園のことを伝えたい」「ニュースが作られることは大変だがおもしろい」と興味を持てるような働きかけを意識する。そのためにも、事前リサーチをして、子どもたちのテレビやニュースへの関わりをつかむ。

(2) 相手に伝える必要性を持てたか～伝える必然性

1学期の紙芝居セッションでは、「めがね理論」（眼鏡のふちが気になると、見たい物に目が行かない・見たい物に集中すると、眼鏡のふちが気にならない）の状態で、表現することを楽しんでいるが、伝えたい必然性の耕しが十分でなかった。2学期の活動は、1学期の紙芝居セッションの反省からスタートし、伝えたい必然性を育てる。

1・2学期とも同じ地域教材「笹尾中央公園」を扱ったが、様々な手段を使って作品作りをし、発表会をゴールにしたことで、子どもたちが「笹尾中央公園のことを伝えたい」という気持ちを育てる。

(3) 自分の考えを相手に伝えられたか～伝える技術

一つのニュースを分析する授業を通して、情報が凝縮されて、様々な工夫がされていることに気づかせる。

5年生がニュースを作るには、分かりやすいマニュアルが必要である。自作のワークシートや「公園を扱ったニュース番組」の録画を活用し、参考にさせる。

活動がニュース番組ごっこにならないように、プロの技術に触れてすごさから学ぶ段階を作ったり、再編集で専門家のアドバイスをもらったりする場を作る。

班で一つのニュースを作ることで、お互いの考えを交流し合い、メタ認知をしていく場を活動の中で作り出す。

総合的な学習では、活動を終えてから「振り返り」の場を持ち、次の活動につなげていく発展性が、子どもたちの具体的な実践意欲につながっていく。

(4) 情報と経験を結びつけたか～カリキュラム論

生活経験と結びつかないまま、断片的な情報だけで考えてしまいがちな現状がある。情報（知識）と子どもたちの経験（体験）とが往復運動して結びつくために、苦労しないで情報を得て納得するのではなく、手や足や目や耳を動員し、社会的事実や事象の関係を見ていく活動を行なう。そのためにも、様々な教科・学習場面を意識して活動を行ない、情報と経験が結びつく場を作る。

5 子どもたちの姿を通して検討課題を振り返る

本実践での子どもたちの姿を述べながら、「4」で挙げた4つの検討課題を振り返る。

(1) 子どもたちのメディアに対する意識調査

メディア・リテラシーに取り組むに当たり、事前の意識をつかむため、2006年9月27日、本校5年生（37人）を対象に、メディアとの関わりについてアンケート調査をした。

【設問1】一番よく見ているメディアは何ですか

テレビ 36人 ビデオ 1人

圧倒的にテレビが多かった。理由は、「好きな番組（ドラマ・洋画・バラエティ・野球）がある」「ニュースや天気予報が分かりやすい」「暇つぶしに見ている」であった。

【設問2】便利だと思うメディアは何ですか （複数可）

テレビ	17人	雑誌	2人
インターネット	17人	ラジオ	1人
新聞	12人	ビデオ	0人

【テレビ】①簡単に見たい時に見られる
②様々な番組（ニュース、事件、事故）
③一番新しい情報

【インターネット】
①検索をすると知りたい事を知れる
②テレビではない内容・一番新しい情報がある

【新聞】①詳しく世の中の情報が書かれている
②テレビにない情報（天気予報 テレビ欄）

このように、メディアごとの長所に気づいていた。

【設問3】とういんプラムチャンネルを見ますか

毎日 1人 たまに 26人

週1回　　3人　　見たことない　1人
月1回　　6人

地元のとういんプラムチャンネルの「学校大好き」のコーナーでは、子どもたちが出た学校行事が放送されている。「週刊プラムトピックス」のコーナーでは、笹尾東スポーツ少年団の紹介番組も放送された。

今回のアンケート調査から、子どもたちは以下のことに気づいた。

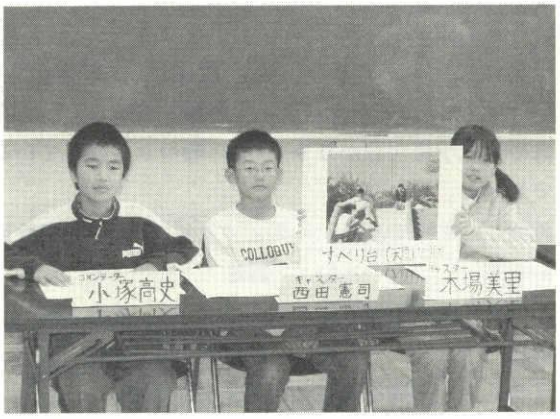
・みんなテレビをよく見ている
・メディアは生活になくてはならないもの
・意外に、事件や事故に興味を持っている
・あまりプラムチャンネルを見ていない

「メディア」「プラムチャンネル」との自分たちの関わり方について、問題意識を持ったようである。また、プラムチャンネルに地域のよさを伝える「メディア」を感じていることが分かった。

(2) 班での「作品づくり」で伝える必然性を高める

学年当初から、子どもたちだけで声を掛け合って物事を進めていくことができなかった。日常的な学級活動・授業において、班で活動することを意図的に仕組んだ。

総合的な学習でも、1学期に「紙芝居セッション」を、2学期に「ニュース作り」を班ごとで行なってきた。自分たちの関心・意欲をなかなか表現しなかった子どもたちだが、11月に班で作成したニュースをビデオで撮影した後、「もう一度撮りたい」と言ってきた。1つの作品を完成させようという明確な目標（ゴール）があると、子どもたちは自分の思いを出そうとするようになった。



ビデオ番組作りの様子

班でニュース作りについて話し合う中で、自分の思いが激しくぶつかり合うことが、あちこちで起こった。その都度、教師もそばにいて聞き役になり、時には意見を整理して解決していった。

「1年間の総合で付いてきた力」について振り返りをさせたところ、「協力・教え合う力」（27人）「話し合う力」（17人）「班の子をまとめる力」（11人）「けんかを止める力　注意する力」（5人）と多くの子が、ぶつかり合ったことを相談して乗り越えたことのよさに気づいていた。

何度も笹尾中央公園について取材することによって、自分たちの笹尾中央公園に対する認識が深まっていった。メディアを使って自分たちの思いを表現する活動をすることによって、伝える対象・お互いの理解を深めていった。班で関わり合う中で、伝える必然性を高めていった。

(3) 伝える環境に合わせた技術

1年間の学習のまとめとして行なった、学習発表会「年刊子どもニュース」[5]の中で、ゲストから学んだ「原稿の読み方講座」の再現をした場面を作った。舞台の上で早口言葉の失敗した例と成功した例を見せて、会場の観客にも言ってもらう、掛け合いの場面を設定した。

ゲスト役の子がマイク係の子に話を振り、マイク係の子が指名をして3人に言ってもらった。その時、会場はざわついていた。そのような状況でも、ゲスト役の子もマイク係の子も、ざわついている状態を治めるような言葉かけや待つ態度もなく、周りのざわつきに声をかき消されながら、自分のセリフを淡々と進めた。「会場がざわついていて聞きづらかった」と観客からの反応があった。

伝え手に自分の思いを伝えるには、伝わりやすい手段を獲得することが必要である。ビデオを前にしてニュースを伝える方法は、何回もの社会見学・ゲストティーチャーによる講座・ニュース作りの活動を通して、何回も追体験できたので、身につけることができた。

だが、それだけでは体育館での発表で求められる力をつけることができなかった。カメラの前で伝える力と、観客の前で伝える力では違う。

同じ内容を相手に伝えることをねらいにしても、状況に応じて情報を伝える力は異なる。視聴者を集中させる技法を意図的につけていく必要がある。

学習発表会の台本は、子どもたちで考えさせて作らせた。学習した内容を詳しく伝えようと、セリフが長くなった。他学年の子から「長いセリフを暗記していてよかった」という感想が多くあり、評価された。「自分についてきた力」というテーマで振り返りをした時でも、長いセリフを覚えられたことを自信にしていた。

1日入学や児童会引き継ぎ、卒業式のよびかけといった、その後の5年生での活動でも、多くの人の前で言う言葉を余裕で暗記できたり、担当の役に立候補する子が増えたりした。

学習発表会の場で、多くの聞き手の前で長く話すことを経験したことによって、自分の思いを多くの人に伝えることに慣れ、相手に伝えるために必要なことを意識していった。多くの聞き手の前でも自分の思いを伝えることができるという、メタ認知を獲得していった。

最後のまとめで、長いセリフを言う場面があった。その場に立って言うだけだったので、観客のイメージに残らない方法だった。キーワードを伝える工夫として、ここでもパワーポイントを使ったり、具体物を使ったりなど、聴覚とともに視覚での工夫が必要だった。

(4) 総合と教科の往還～カリキュラム論

(1) での事前調査を受けて、実践の初めの段階に、ニュース番組分析の時間を取った。NHK「ほっとイブニングみえ」[6] の1ニュース（約2分間）の原稿を聴写することで、原稿の特色を分析体験した。

この時、全体の構造が分かるようにあらかじめ分節ごとに分け、区切りを意識させながらメモできるように、ワークシートを工夫した。5回聞くうちに、ニュース原稿の構成をつかんでいった。

とういんプラムチャンネル・NHK津放送局への社会見学、ゲストティーチャーによる講座、自分たちでのニュース作りでの原稿など、様々な活動でワークシートを作成し、聞く・考える土台としてのメモを取る具体的な手立てをとった。このことで総合的な学習での活動がスムーズに進んだだけでなく、総合的な学習以外の時間でも、班やクラス、委員会などで話し合う時に、自分たちで必要性を感じてメモを取ることの大切さをつかんでいた。また、メモを取ることで、相手に質問をすることにもつながっていた。

学年当初、ゆるやかに40人がいるだけで、強くつながったりぶつかり合ったりという雰囲気はなかった。大人数ということで、歌声や音読のパワーがある反面、多くの人数に埋もれて、自分の思いを出す場が少なかったり人任せにしたりしているところを感じた。

そこで、次の学級の課題を立てた。

A　授業開始時にただ教室にいるだけで、自分から声をかけようとしたり何かをしようとしたりしない、受け身な気持ちでいる。その場に合った気持ちを持ち、自分たちで授業を進める意識を育てたい。

B　失敗するのが怖くて、自分の思いをあまり話そうとしない。人数が多いので、思いを表現しなくても済んできた。自分の思いを表現できる様々な機会や、発言に対して反応する雰囲気を作りたい。

C　些細なことの確認・分からないこと・些細なトラブルを、近くの子に相談せずに教師に言う子が多い。自分たちで声を掛け合う機会を作り、仲間のいい点・困っている点に気持ちが向くようにしたい。

年度末に、子どもたちに「総合で自分の力がついてきたこと」というテーマで、1人5つずつ自由記述させた。ベスト10は次の通りだった。

協力・教え合う力	(27人)
話し合う力	(17人)
相手に分かるように伝える力	(17人)
大きな声を出す力	(17人)
素早くメモを書く力	(17人)
長く文章を書く力	(15人)
自分で考えて行動する力	(12人)
班の子をまとめる力	(11人)
長いセリフを暗記する力	(9人)
あきらめないで頑張る力	(7人)

これらのことは、総合的な学習だけでは達成できない。今回の単元構想と同様に、他教科と横断的に指導し続けたことで、子どもたちに力が付いてきた。カリキュラムを考えていく上で、学習内容だけで計画するのではなく、教師の子どもたちに対する願いを明確に持つことで、ゴールが見えてくる。ゴールを目指す方法を模索していくことが大切であると考える。

今回の実践では、3人のゲストティーチャーと子どもたちは出会った。小寺恵さんから、「原稿の作り方講座・読み方講座」を受け、自分たち作成の原稿の添削をしていただいた。「小寺さんから学んだこと」と題して、その時の思いを綴った。

> 10月23日と11月6日の2回、小寺恵さんに5年教室に来ていただき、「原稿作り講座」[7] と「原稿の読み方講座」[8] をしていただきました。
>
> 私たちに分かりやすいように、小寺さんは、かわいい手作りの絵コンテを用意していただき、原稿の作り方を分かりやすく教えてもらいました。
>
> また、私たちが作った原稿に、赤ペンでしっかりとアドバイスを書いてもらい、ニュースを読む時にとても読みやすくなりました。
>
> 「笑顔で語りかけるように読もう」と小寺さんにアドバイスをもらいましたが、私たちに教えてくれる時も、笑顔で教えてくれて、とてもうれしかったです。

プロの小寺さんから、ニュース作りの具体的な技術を教えてもらったり、見せてもらったりした。そのことで、子どもたちの「伝える技術」という情報に触れることができた。小寺さんからの「笑顔」という情報レベルで教わるのではなく、「笑顔で教えてくれる」という経験レベルまで、子どもたちは感じることができた。情報と経験がつながったことで、「肯定的な学習体験」[9] をすることができた。小寺さんの言葉を自分の経験につなげることができたという点で、メタ認知を深めることができた。

小寺さんの絵コンテ使用の講座

【メディア・リテラシーから学んだこと】

10月から2か月間かかって、自分たちの班でニュースを作りました。班で意見がまとまらなくて、もめることもよくありました。それで初めて、ニュースを作るには、多くの時間が掛かることと、正しく分かりやすいように見ている人に伝えることの大切さを感じました。

ただテレビを見るのじゃなくて、真剣にていねいにテレビと付き合っていきたいと思いました。

ニュース作りには多くの手順があり、この単元全体でも93時間という相当な時間が掛かった。総合的な学習は、一つ一つの活動を仕上げるには時間がかかり、何度も同じ過程を繰り返すことで、力が高まってくる。練り上げの過程が必要であり、時間が掛かる実践であるが、メタ認知を深めるという点で値打ちがあると考える。

時間が掛かって様々な表現方法を学んだ。ニュース作りの方法を今後の表現方法の財産にしてほしいし、今後は自分たちで見通しを持って段取りしてほしいと願う。

小学校国語では、2〜6年生まで情報活用単元が設けられている。言語情報の処理という観点から、情報を活用して、自分の考えを表現することが求められている。また、小学校社会では、情報社会の進展に対応して、情報・コミュニケーションのあり方・表現活動が重視されている。

今後、様々なメディアの普及によって、事実に対して1つの固定的な見方で見るのではなく、とらえる意味に幅があり、それぞれのとらえ方を吟味し合いながら、自分の考えを見つめていくことが必要である。

（伊藤幸洋）

6　おわりに ― 大学におけるメディア・リテラシー実践との共同 ―

伊藤実践の共同研究者として、実践の観察と分析において佐藤が考えたことは、前項までの伊藤の記述の中に織り込まれている。

ここでは2006年度において伊藤実践の断続的観察と共同討議を行なう一方で佐藤が実践した「教育課程論Ⅱ」（教職科目、2単位、後期実施）について若干の紹介を行ないたい。なぜなら佐藤のこの授業の全体テーマもまた「『総合的な学習の時間』のテーマ事例としての『メディア・リテラシー』」であり、全14回中12回の授業を費やして、メディア・リテラシーに関する学習、実践的体験、そして作品づくりに取り組んだのである。

伊藤実践の観察から学んだことを「教育課程論Ⅱ」の授業進行にも取り入れていった。そして、詳述はできないが、例えば、5で紹介されている伊藤学級でのメディアに関するアンケートをほぼそのままの内容で「教育課程論Ⅱ」においても実施したり、伊藤学級でのプロの支援を受けたニュース原稿づくりを見て、「教育課程論Ⅱ」での三重大学を紹介するニュースor CMづくりの活動の配当時間を増やし、またNHK津放送局アナウンサーをゲストに迎えてリハーサル時にダメ出しをしていただいたりした。

当初思い描いた「小学校での実践と大学での実践が並行し、連動し合いながら展開していく」という状態には程遠かったが、大学教育実践が小学校教育実践から学ぶことがまだまだたくさんあることを改めて実感した取り組みであった。　（佐藤年明）

註

(1)『広辞苑』 第五版　岩波書店　1998年

(2)『大辞泉』 初版　小学館　1995年

(3) 鈴木みどり編 『Study Guideメディア・リテラシー【入門編】』 リベルタ出版　2004年　P. 19

(4) 日本民間放送連盟編 『メディアリテラシーの道具箱』 東京大学情報学環メルプロジェクト・東京大学出版会　2005年　P. 4

(5) この様子を、地元ケーブルテレビのとういんプラムチャンネルで、2007年2月に放映された。

(6) NHK津放送局が製作し、毎週月曜日から金曜日、午後6時30分から午後7時まで、三重県（一部地域を除く）を対象に放送している。この時は、「鈴虫取り」（2006年8月31日放送）というニュースを扱った。

(7) この様子は、地元ケーブルテレビのとういんプラムチャンネルで、2007年1月に放映された。

(8) 授業の様子は、伊藤幸洋「出前講座『原稿づくりと読み方講座』（小5・総合　社会　国語）〜人との出会いから「メディア」を学ぶ」『授業づくりネットワーク』2007年2月号・学事出版・P53〜55参照。

(9) 伊藤幸洋・佐藤年明「肯定的な学習体験を持てる算数少人数教育」『三重大学教育実践総合センター紀要』第25号　2005年　P. 65－70